

詩佛の再北遊と加越能文人たち（その一）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 畑中, 榮 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/35092

詩佛の再北遊と加越能文人たち

(その一)

畑 中 榮

はじめに

詩佛の再北遊については、大森林造氏によって『大窪詩佛ノート』(平成十年八月梓書房刊)に纏められ、越中における動静は大西紀夫氏による「東林とその交遊」(『富山女子短大付属高校年誌』)に調査報告されている。また加賀における動静の一部は弊著「加越能文人の交遊」(本書第34号)に触れた。しかし加賀における動静は未だまとまったものを見ない。そこで本稿では、加賀における詩佛や加能文人達の動静を中心に記すことにする。なお越中における動静は大西氏の論考に従っていることはいうまでもない。

また本論では出典を示すために所々に略称を示したが、それは次の如くで、その題号は注に記した。また加賀文人の作品からの出典もあるが、それは本文の処々で示してある。

(5) 〓 『再北遊詩草』 詩佛の作品番号。

(附) 〓 『再北遊詩草』 附録の作品番号。

(東林) 〓 「東林とその交遊」

一、越中における詩佛

1. 五、九日

文政七年夏再び北遊に向けて江戸を発った詩佛は、高崎・長野善光寺・牟礼を経て越後赤倉温泉に暫く憩った後、糸魚川・親不知を経て越中高岡に入ったのは、八月五日のことである。高岡に着く早々長崎浩齋・玄天・津田半村達の熱烈な歓迎を受けた。詩佛は詠う(33)。「間闕して経過す、路は悠々。客程は知らず、風は已に秋なるを。鮮膾せんがいは何ぞ疑はん、纒いとすじ(いとすじ)より細きを。越中の晩飯、陸舟楼」と。歩き悩んで辿り着いた陸舟楼は、高岡堀上町にあつて堀川を跨いで建てられていた。一見川に浮かぶ舟に見えた所よりの名である。中秋ともなると近海には鮮魚が豊かに獲れ、それから得られる刺身の新鮮さときたら江戸ではとても味わえるものではなかつた。詩佛は九日の夜までをここで宿したが、滞在中来訪した

文人を一覧する。粟田庸齋・津田半村・林竹筵・上保梅園・僧玄天・僧痴王・僧聖潭・津島東亭・松田丁夢・僧台巖・野村空翠（以下空翠と略称）・長崎浩齋・津島東亭・多湖檀陰・九阜・本林青圃・詩天等である。なお空翠は金沢よりわざわざ出迎えに来ており、これより詩佛が還るまでの三ヶ月を離れることなく従った。^{注11}

粟田庸齋は高岡の儒医で、松田龍門の養子となり文政元年まで京に遊学し、帰って東林の門に入った人。津田半村は十村南家に生まれたが酒造業の津田家の養嗣子となった。風流韻雅を愛し書樓を習静堂等と称して漢詩を特に好み、交遊は京などにも多い。上保梅園は福野の人で吉左衛門と称し、俳諧・和歌・書畫・詩を善くした。家は藏宿を営み、算用聞・肝煎等の職についていた。僧玄天は後に詩佛も訪れる水見円満寺の僧で、義天はその息である。詩佛は北遊の時もここに立ち寄り詩をものしている。また痴王は法諱を玄妙といい、高岡光西寺（本願寺派）の住持。兄の雪象、弟の志崇と共に詩を能くした。僧聖潭は東林の弟で戸出妙壽寺の住持で、詩天は越中下牧野東弘寺（真宗西派）先住で『春藻錦機』の作者の一人でもある。文化八年師法詠の没によりその嗣を継いで第十八世となつていた。

津島東亭は越後の渡邊養順の息だったが、富山藩の侍医木村東詮の女婿となつた。しかし性は軽浮で養父とそりが合わず、木村姓を名のる前の津島姓（仮に津島竹山の義弟となつたこともある）を名のつた。能登の七尾や水見・金沢に寓したが晩年は高岡に住んだ。松田丁夢は高岡の医師第九世三知で、粟田庸齋の弟。龍門の養嗣子となつて詩文俳諧に長じ陸舟樓社中の一人となり、後年長崎浩齋等

と諮つて神農講を起こした人。僧台巖は高岡片原町にある超願寺の僧で和歌を能くし筆札に妙で扁額も幾つか残す。超願寺は真宗東派で、親鸞の弟子性信の創建になるといふ。長崎浩齋は十九歳で江戸に遊学して大槻磐水に入門してオランダ医学を学び、加越の間で蘭学を唱える嚆矢となつた。医師の名声は越中のみならず、加能・飛騨・越後にも知られ、入院治療を乞う者は引きも切らなかつた。この時二十六歳であつたが、後高岡漢詩壇の中心として「松映房社」を主宰する。なお多湖檀陰・九阜・本林青圃・林竹筵は未詳であるが、いづれも年若い僧や医師を志す文人達だと推測される。

この陸舟樓を詠んだ空翠の作掲げる（附151）。

與詩佛先生宿陸舟樓 空翠

殘蚊無力繞燈檠 殘蚊は力無くして燈檠を繞り。

萬斛新涼與睡清 萬斛の新涼は睡と與に清し。

樓下小流樓上雨 樓下の小流 樓上の雨。

兩般更作一般聲 兩般更に一般の聲を作す。

「燈檠」は灯火の台。初秋の蚊が力なく灯火の周りを飛び巡り、水上の楼では涼風が清々しい。加えて楼上と楼下のさらさらという水の音が涼味を増すというのである。

陸舟樓の横は関野神社である。七日は雨だったが詩佛達はここに参拝し、高岡の古城に向かつた。関野神社・高岡大仏・古城はほぼ一直線に並んでいる。次もその古城に登つた作である（附152）。

登高岡古城 空翠

自嘆居諸容易移 自ら嘆ず、居諸の容易に移れるを。

眼辺陳迹有誰知 眼辺の陳迹を誰有りてか知らん。

残荷花冷涼風度

残荷の花は冷ややかにして涼風度り。

荒草天清朝露滋

荒草の天は清くして朝露し。

豪傑生前三尺劍

豪傑生前、三尺の劍。

聲名身後幾行碑

聲名身後、幾行の碑。

吾來日暮寂寥處

吾來りて日暮、寂寥の處。

一陣松濤虫語悲

一陣の松濤に虫語悲し。

「居語」は歲月の意で、「陳迹」は高岡の古蹟をいう。高岡城は前田利長の築城にして、大阪夏の陣の後廢城となつた。その後時と共にその古蹟を訪う者としてなく、残荷に涼風が吹き荒草に朝露が深く結ぶのみである。豪傑の武勇も声名も共に石碑に名を残して忘れ去られ、その碑の下で虫が悲しげに鳴くのみであると。なお「三尺劍」は漢の高祖が「吾れ布衣にして三尺の劍を持って天下を取りし」と言つた故事によつて、前田利家や利長の業績に擬えている。一行は古城に登つた後は、高半江の習靜堂に遊び、また古城の南畔にあつた南半村宅に半日遊んで「三椀の茗(お茶)」を楽しんだ。

九日頃の月夜、長崎浩齋の清風明月樓で詩宴が開かれた。時に越後の原松洲も参加していた。痴王が詩佛の高岡在住中のことを振り返りつつ、この清風明月樓でのことを詠う(附12)。「浩齋請ふ有り、風月の夜。杯盤には咄嗟に珍膳を薦む。高樓の四面は清涼の景たり。共に欄干に倚りて醉眸を醒ます。此の遊びは許の如し高岡の地。旬餘駕を駐めて轡鞅(たづなとしりがい)を解く」と。また詩佛がいう(38)。「昔書く、清風明月の字。今登る清風明月の樓。書す時風雪滿天暗く。見す清風明月の秋」と。文政四年の北遊の節は高岡大火の三ヶ月後のことであり、加えて九月中旬の空はどんより雪雲に

覆われて暗天であつた。

樓が完成したのはそれより更に三ヶ月を経た文政五年閏一月上旬である。その頃詩佛は金沢から江戸に還る途中ここに立ち寄り、「清風明月」の字を選定していた。東林が「清風明月之樓に題す。樓は詩佛先生の名づくる所なり」と題している(東林3)。「中正に屋を新築し、屋上に又樓を起つ。樓は成るも猶は未だ扁あらず、扁字は名流を選ぶ。今年壬午の春、吾が翁偶此に遊ぶ。古を考へ且つ今を証し、之を名づくるは卒爾に非ず。記は赤壁の賦に取る。(中略)一たび此の樓に上り来れば、人をして清を骨に徹せしむ。清風は宿醉を消し、明月は夜の涼を生ず。君が家に童の福無きも、天地と与に長なるべし」と。樓を新築し屋上に樓を架したのは浩齋の二十五歳の中正の歳である。しかし扁額がなかつたので詩佛に依頼して選んでもらつたのであつた。東林は寿ぐ、未だ子宝に恵まれておらぬが、この屋は天地と共に永久であらうと。

それから四年経つた高岡は見事に復活していた。「主人相ひ迎へて樓頭に宴す。同盟の少年は才俊多く。喧呼しき聲の中に詩圖(詩の優劣)を分つ。秋熱は燦くが如く金も燦に堪へ(やつと浴けないでいる)。纒かに此の樓に登りて裘を襲はんと欲。飲は鯨魚の如く海も尽くす可く。豈に畜々百川の流れも吸ひ尽くすならん。清風明月君飲まずば、金谷の罰爵は自ら籌有り」とは詩佛の詠である(38)。その意気軒昂として活気に満ちた様は容易に見て取れよう。時に集まつた才俊と呼ばれる少年とは誰をいつたろうか。ちなみに津田半村はこの時二十八歳、長崎浩齋は二十七歳、松田丁夢は十八歳、痴王は三十一歳、聖潭は三十五歳であつたが、年齢未詳のこれ

以外の人として同様に二十歳前後の若者が多数を占めていたのである。酒を飲む様は鯨魚の如しとも詩佛は感歎する。³²⁾

2. 十、十二日

十日は、清儉堂主人痴王が詩佛を自坊光西寺に招請した。光西寺は小矢部川の下流、国府の丘を少し上った見晴らしにある。その眼下には国府港が見え、後背に小山を抱え前後を松の木に囲まれた閑静な寺院である。ここを訪れて詩佛は詠う(43)。「沙辺に村尽きる處、孤寺は古松の間にあり。海水は前岸に激し、濤聲は後山に在り。來投して三日宿し、占め得たり十分の閑。一點も熱を知らず、真成に消夏の湾」と。詩佛はここに十二日まで滞在する。

十一日は詩佛・痴王・空翠に東林を加えて江村漁舎に遊んだ。痴王の作には、「孤篷朝發す清溪の岸、直ちに海門の深き處に到りて休む。江村漁者巒して相ひ待つ。邀へ飲みて一夜湖上に浮かぶ」とある(附12)。一行は朝舟に乗って小矢部川から海竜湖(放生津瀉)に出て海からの眺めを楽しみ、夜になって江村漁者に迎えられて奈呉浦に月を愛でた。詩佛が詠う(41)。「半輪の明月満江の流。月に棹さして舟は鏡面に浮かぶ如し。若し坡公重九の例を用ひば。妨げず今夕を中秋と作すを」と。月は半輪だったが海上で眺める月は、蘇東坡の赤壁の遊びに匹敵するというのである。なおこの遊びのために船を出してくれた江村漁者について、大西紀夫氏は綿屋彦九郎ではないかといわれる。

僅か三日間の逗留はあつという間に終わった。痴王にとつて誠に心に残る三日間であつた。十三日、痴王は詩佛を送るに当たつて詠う(附12)。「山肴野酌、味は薄しと雖も。清飲三日、我がために留

まる。欲極まりて哀生ずるも須臾の事。端無くも今朝、離愁を促す。涙を揮ひて溪橋の上に相ひ送れば。橋下の秋水は咽びて流れず」と。詩佛を見送つたのは伏木國府の港だつたらうか、詩佛は舟に乗つて玄天と津島東亭の待つ有磯の松林に向かつた。³³⁾

3. 十三、十七日

有磯松林は、大伴家持の「二上山の賦」には「洪谷の崎の荒磯」とあり、「白波の荒磯に寄する洪谿の崎徘徊り松田江の長濱過ぎて宇奈比川……」とある。伏木國府から水見にかけて続く松林である。これは今でも幅二十mに余つて七km以上続く。大伴家持が在任中、田子浦や布施湖に遊んだ時通つたのもこの径である。

玄天と津島東亭が詩佛を待つた有磯の松林もその水見近くの海岸であつた。伏木から船に乗つて、海上からの眺めを楽しみながらやってくる詩佛一行を、二人はその松林の一段と涼しげな場所を占めて、歓迎の宴場として待つていた(附15)。ここには茶屋もあつた。³⁴⁾

有磯松林奉迎詩佛先生

玄天

迎君敷席傍松陰 君を迎へて席を敷く松陰の傍。

陣々清風涼益深 陣々の清風によりて涼は益深し。

肴酒携來相待久 肴酒を携へ來りて相ひ待つこと久し。

閑情獨聽自然琴 閑情にて獨り聴く自然なる琴。

玄天の住持する円満寺は真宗東派で、水見の街中(南大町)の比較的海に近い場所にあつた。手入れの行き届いた庭には海棠の花も咲いていた。「帯痕は地に満ちて庭沙に印す。奇石は池を圍みて緑藪(苔)遮る。一種の嬌紅は句に入るに堪へたり。山茶樹下の海棠

の花」と。これは円満寺で詠じた詩佛の作である(47)。

一行が円満寺に着く頃だったろうか、七ツ時から雷雨となった。

この雨が残暑を洗い流してくれたと詩佛も玄天も喜んでゐる。玄天は「迎ふる時雷雨は炎塵を洗ふ。言ふを休めよ、倅地供給無しと。

萬斛の涼風送り得て新たななり」と詠い(附126)、詩佛もまた「更に雷公の供帳(屋外での冥席)を助くる有りて、黄昏の一雨は涼を送りて来る」と応じた(46)。詩佛はここに十七日まで逗留する。

十四日に晴れた天候も、中秋となつてまた雨となつた。詩佛達は明月を眺める代わりに、布施湖と多湖湖に遊んだ。玄天・詩佛に加えて粟田庸齋・義天・空翠も同伴した。布施湖は萬尾川沿いにあつて、現在は十二町潟となつてゐるが、そのころは広大な水海があつた。また多湖湖は下田子町を中心とした湖沼で、かつては布施の水海と水路によつて繋がつてゐた。

円満寺からは五十m余りで萬尾川の下流へと行き着く。詩佛達一行はそこから船で布施湖へ漕ぎ出したのだらう。萬尾川を西に漕げば間もなく布施の水海が渺々と広がる。平布浦・重姫浦・古江等の浦々を漕いで行けば、やがて布施の円山が湖上にポツンと頭を出す。そこから更に南西に進めば十三湾もあつた。田子はこの十三湾から東に道を取つて三km余り進んだ距離にある。そしてその田子の一段の高みには、大株の藤波が田子浦藤波神社の鳥居を抱え込んでゐる。富山で一番の藤の花の見所なんですよ、とは土地の人の言である。

天平勝寶二年(七五〇)四月、大伴家持は次官内蔵忌寸繩磨・判官の久米廣繩等と共に布施の水海に遊覧して多祜の湾に船を泊め、

そこから藤の花を望み見て和歌を連作した。^(注6)

藤波の影なす海の底清み沈著く石をも珠とそわが見る(家持)
多祜の浦の底さへにはほふ藤波を挿頭して行かむ見ぬ人の為(繩磨)

藤の花が影を映してゐる湖水が透明で、底に沈んでゐる石をも真珠かと見ると家持は詠い、多祜の浦の底にまでも美しく映えてゐる藤の花を頭に挿して行こう、まだ見たこともない人のためにと、繩磨が詠う。この頃は藤波の咲き誇る小丘の裾あたりまで、小波が打ち寄せてゐた。

しかし現在も、詩佛がここを訪れた頃も、そうした汀は想像も出さない有様であつた。その変わりようを見て詩佛が詠ずる(49)。

多湖浦

詩佛

蟹舎漁村数点煙

蟹舎の漁村、数点の煙。

伴公祠下不通船

伴公の祠下に船を通ぜず。

藤花映浪亦何処

藤花浪に映ずるは亦何の処ぞ。

湖面如今半作田

湖面は如今、半ばは田と作る。

そしてその詩注にいう。「地に大伴黒主の祠有り、蓋し公、越中の守となり、久しく此に住まる」と。黒主は家持の誤で、祠は藤波神社のことである。またもう一首の作に「稻風薫す秋日の晩、見ず當年の十三湾」ともあるが(50)、田子浦の十三湾もすつかり田と変貌してゐた。空翠も「藤は空し田子の浦、雲は隠す伴公の祠。此の地に多き遺跡を、白鷗は知るや知らずや」と詠うが(附156)、変わり果てた遺跡を改めて訪う者も少なかったのである。

二、金沢における詩佛

十七日、詩佛は水見で林竹窠・聖潭・痴王に見送られ、能登半島を横断して白尾の岩佐墨屏の別業を訪うた。岩佐氏は河北郡白尾の人で、金津郷二十四村を治めた十村。三年前の北遊の際にも四屏樓の宴に参加していた。前日詩佛に七絶を寄せ(附43)、翌日は詩佛の来訪を受けた。その時の七律にいう(附44)。「楼上の風光は総て齊しからず。一晴一雨望みは將に迷はんとす。鐘は蒼鶻の深き辺り従り落ち、日は丹楓の染む處に向ひて低つ。園に寒寂を摘んで晚供に充て、瓶に霜菊を投じて新題に入る。先生、吾が閑寂を慰めんために一卷の詩書を手自携ふ」と。墨屏はこの夜富貴堂に詩佛を招き宿所とした。^(注9)

4. 十八・十九日

そして十八日、富貴堂を出た詩佛は白尾から河北潟を舟で宮腰まで来て、異雲屏宅に宿した。「村を尋ね来て酒を買い、宿に投じて柴扉を叩く」と雲屏が詠う(附60)。雲屏は宮腰の人で宅は河北潟の淵にあつたのだろうか。「客を迎ふ、蓮湖の上。輕舟は落陣に對す」ともある。

十九日は宮腰から金石街道を金沢に上つた。その道のりを詩佛は、「路を挾んで兩行の涼織樹、宮腰村の外には未だ埃を生ぜず」と、路の両側を松樹で傘のように囲まれた金石街道の風景で叙した。そしてその街道を「監官云はく、是れ開倉の日と。牛馬擔夫は陸続として来る」と賦したが(53)、この日は塩の蔵開きの日で、

金沢からの人馬の往来が多かつたのである。次いで空翠は詩佛を鳩岩の瀧に案内して自宅に入つた。鳩岩の瀧は末町にあり、別所吉兵衛の家の後方に見えたと『亀尾記』にいう。^(注10)吉兵衛の家の後ろは犀川に面しており、そこから鳩ヶ嶽の瀑布が落ちて、その景は言語に絶すると。詩佛が謳う。「酔ひて泉聲を聴きて石を枕にして眠る。閑せず、流沫乱れて烟の如きを。一場の奇夢は醒めて猶ほ記す。直ちに銀龍に駕して九天に上るか」と(54)。現在は瀧の横に酒樓が建っている。時に香林坊縁陰が同伴し(附26)、錢田立齋も同伴の予定だったが、病気で同伴ができず無念がつている作が残る。詩佛はこれ以後空翠の家に滞在して、ここを基点に行動する。^(注11)

5. 二十日以降

この頃と考えるが、詩佛は犀川橋の南にあつた孤松岳(亭)に登つた。七月十日の齊広の没と十二日の發喪より、金沢ではまだ喪に服している最中であつた。「雲山煙水は色無きが如く、總て秋光慘愴の中に在り」と詩佛も詠じている(56)。

二十六日は空翠社友が集まつて観月樓で詩宴を開いた。韓西阜の主催になるものだつたらうか。西阜の作に「銀燭は花を摧きて水漏移り、同人相ひ集まりて襟期を話す。端なくも歎極まりて哀情動き、恰も前年送別の時に似る」という(附71)。「襟期」は襟懐で、詩佛の北遊以来の積もる思いをいう。思いがけなくも再会した喜びに感極まる思いは、三年前の別離の感慨に似て無量であつた。例えば亀田鶴山が詩佛を迎えた様を一見しよう(鹿心齋了)。

仲秋迎詩佛先生再遊喜而賦 亀田鶴山

人生如寄耳 恰似水上萍 聚散無定跡 行李遇再經

書来喜不寐 早起掃戸庭

新移藤坐榻 蕨門不開扇

幽討泛能浦 奇探涉越垻

明月楊柳岸 秋風蘆荻汀

充囊多異料 詩句皆精靈

相見頭共白 劇談眼終青

莫辭三蕉葉 幸貯雙玉瓶

百年已強半 急景豈可停

人生は寄耳の如く、恰も水上の萍に似たり。

聚散して定むる跡なく、行李して再び経るに遇ふ。

書来りて喜びて寐ねず、早起きて戸庭を掃く。

新たに藤の坐榻を移し、蕨門は開けて扇さす。

幽討して能浦に泛び、奇を探して越垻を渉る。

明月の楊柳の岸、秋風の蘆荻の汀。

充囊には異料多く、詩句は皆精靈たり。

相ひ見れば頭は共に白く、劇談して眼は終に青し。

辞すこと莫れ三蕉葉、幸ひに雙玉瓶を貯ふなれば。

百年は已に強半たり、急景を豈に停む可けんや。

これは観月樓の詩宴から間もなくの作だと推察する。詩佛が来訪するとの報知を受けてより嬉しさで寝てもおれず、来訪の日は早朝から門戸や庭を掃き清め、新品の藤の座椅子を庭前に設け、いつ詩佛が来てもいいように玄関の門は開け放しにして、今か今かと待ち望んでいる……。こうした欣喜雀躍とした様は鶴山のみに限らなかつたであろう。誰しもが詩佛の来訪を待ち望み、推するに順を競うという様ではなかったか。録されていない歓待の席はひきもきらず実施されたものと思われる。三年前の北遊の時の送別の宴では、「同社争ひて相招き、席に山海の珍を具ふ。酔中書或いは畫、歡娛夜は晨に連る。」と詩佛がいつていたが、詩佛を再び迎えての熱狂もま

た前回に劣らなかつたであろう。

〔閏8月〕

6. 六日の致堂宅小集

今回の北遊では、前回に増して致堂との交遊が頻繁だった。閏八月になって齊廣の喪も明け、それまで晴れていた天気も六日だけは雨となった。そんな中詩佛が致堂を訪れていう。「別れてよりこのかた白髪は満頭に生ず」と(58)。時に詩佛は五十八歳、致堂は三十六歳である。積もる話は尽きない。「新を話し旧を説きて情の真を覚ゆ。況や是の盤に北海の珍を供ふ。また老饑をして新たに指を染めしめば、両螯の手は劈く蟹の輪困」と(59)。致堂は歓待の心を珍膳に示したのである。致堂も応えていう。「平生此の心の真を愛するために、用ひず寶筵に八珍を陳ぬることを。許の如きの放狂を君恠むことなかれ。杯を持つこと、我も亦膽は輪困」と(附2)。詩佛は己の蟹の如く節くれ立った手を輪困と称したのに対し、致堂は私の肝は輪困の如く小さいのですよと応じた。気のおけぬ者同士の喜々としたやりとりであった。

環翠樓の門前には金木犀の花が咲いて香風を寄せ、庭の小路にも色とりどりの花が咲き、沙雞が鳴き交わしていた。秋霧が樓の一面を覆うと日晩れである。「渭樹江雲響ぞ歎するに足らんや。再遊の縁在りて君が歎を響す。今従り屢来て興に乗ずるを許せ。秋月先づ期す、三五の團」とも詩佛が謳う(61)。「渭樹江雲」とは杜甫の「春日憶李白」に「渭北春天の樹、江東日暮の雲」とあるのに基づき、遠方にある友人を思う情の切なることをいう。一人は渭水のほとり、他は長江のほとりにあって、互いに思いを寄せ合う心情をい

う。これまで江戸と加賀に在つてお互いの遠さを歎じて来たが、縁あつて再遊したからは屢々あなたの許を訪れたい。手始めに先ず中秋の十五日に訪れようと思うがどうですか、というのである。

ところで「再北遊」附録の致堂の項目では、

1. 甲申秋閏八月初六詩佛先生見訪弊廬喜賦（四首）
5. 招飲詩佛先生席上賦呈二首

7. 閏八月十五日招飲詩佛先生席上分韻

8. 秋水
9. 秋風
10. 秋柳
11. 秋蝶
12. 秋草
13. 紅葉
14. 茗花

の序列となつてゐる。しかし『致堂詩稿』巻八と照らすと少し錯誤が見える。つまり閏八月六日の小集には、1、4、8、12の九首が賦されたのであり、5、7の三首は十五日に賦され、13、14の二首は九月下旬頃の小集のものと分かる。また7の詩題は『致堂詩稿』では「無月分韻」となつてゐる。以上より六日の小集では「秋水・秋風・秋柳・秋蝶・秋草」の五題が出され、それに詩佛・空翠・西臯・養輪朴仙が和したことになる。この時の様子を、致堂・詩佛・西臯の三人の作で見たい。

秋風

無窮草樹最先知

驅使炎氣涼似期

颯々蕭々夢醒後

悽々慘々酒消時

誰家人遠砧聲苦

此處琴清松韻奇

横山致堂

無窮の草樹、最も先に知り。

炎氣を驅使して、涼を期する似し。

颯々蕭々たり、夢の醒めたりし後。

悽々慘々たり、酒の消ゆる時。

誰が家ぞ、人遠くして砧の聲の苦なるは。

此處に琴清くして、松韻奇しきなり。

宋玉心清君莫説

宋玉の心清きことを君、説くこと莫かれ。

又看顔状鏡中移

又看る、顔状の鏡中に移れるを。

本詩は韻を「知・期・時・奇・移」の上下四支にとり、秋風の生ずる所より始めて人生の秋波に到つて終える（附9）。夢が醒めた後のようにひっそりともさびしく吹く風、酒の酔いが醒めた後のようにいたましく悲しい風、時には遠くにある夫を想つて打つ砧の音を伝え、松の葉を振るわせて琴の妙なる響きを伝える風。宋玉の「風賦」の心清きことをいうまでもあるまい。鏡を見れば白髪となつた顔かたが見える、と。この致堂の韻字をそのまま受けて詩佛も賦す（71）。

秋風 詩佛

先在梧桐葉上知

先づ梧桐の葉上に在りて知り。

吹來陣々似相期

吹き来て陣々相ひ期するに似たり。

千年勝事思鱸日

千年の勝事は鱸を思ふ日。

一段風流落帽時

一段の風流は帽を落とす時。

花綻柳開雖已昨

花綻び柳開くは已に昨なりと雖も。

菊香蘭秀又新奇

菊香り蘭秀つるは又新奇なり。

何因颯々蕭々裡

何ぞ因ん、颯々蕭々の裡に。

欲染哀情軫眼移

欲染哀情は眼を軫じて移るを。

先ず青々とした梧桐の葉をゆする風に秋を感じ、その秋風を感じて晋の張翰が、呉の鱸魚の膾を想ひ名爵を棄てて呉に帰つた故事にふれる。次いで重陽に龍山で宴した桓温が落帽した孟嘉をからかつたところ、それに応えた孟嘉の美文をもたらしした秋風のいたづらにふれる。次いで花が咲いたと思つたら、いつの間にか秋の菊や蘭が

高貴に香っているといて、時の移ろいの早さにふれる。かくして蕭颯としても淋しい秋風の中に、やがて欲楽哀情はまたたく間に老境へと移るのだと、潘岳の「秋興賦」や漢武帝の「秋風辞」を背後に滲ませつつ、秋風の哀しさを歌い上げている。

秋風

韓 西阜

商音満樹景光移

商音は樹に満ちて景光移り。

習々都知冷透肌

習々として都て知る、冷たさの肌に透るを。

寒雁聲傳楓盡後

寒雁の聲は傳ふ、楓の盡る後を。

夜砧響送月清時

夜砧の響は送る、月の清む時に。

淒涼暗動班姬恨

淒涼は暗に動かす班姬の恨みを。

蕭瑟乍生張翰思

蕭瑟は乍ち生ず張翰が思ひを。

莫使渠儂落烏帽

渠儂をして烏帽を落とさしむること莫かれ。

鬢邊已愧數莖糸

鬢邊に已に數莖の糸を愧づるなれば。

そして西阜もまたこの二人の韻を受けて、秋風の蕭々とももの悲しい商調の響きが秋の肌寒さをもたらし、空を渡る寒雁の声や孤婦の砧打つ声は、楓葉の落ち尽くした冬の哀しみを伝える。また淒涼とした響きは班婕女の忘れ去られる恨みを動かし、蕭瑟たる声は張翰をして人生のはかなさを感じしめたことに詠い及ぶ。そして孟嘉に倣ってこの風が、自分に美文を求めようなことはしてほしくはない、そのような能力はないのだからと謙遜して、その烏帽子に隠した白い鬢が顕わになるからと洒落てみせた(附76)。

一方空翠は、先ず秋風が雁を南に送り、それと共にあお桐の葉におりた露を飛ばし、菊の花の香をほのかに伝えてくれる様を「一陣は何れより雁行を送る。聲々は月に和して空牀に入る。碧梧は葉を

拂ひて濃露を飛ばし。黄菊は花を吹きて暗香を傳ふ」と詠じた。次いで人をして旅愁を引き起こし、故郷の鱸魚を想い起こさしめて官途を断たしめた張翰の心への働きかけに及び、弱々しい街灯を明滅させる秋風が、軒端の鈴を吹き鳴らして人をして断腸に駆らしむる思いを「羈愁を引き起こして衣は漸く薄く。郷夢を驚回して夜は偏へに長し。青燈明滅して淒涼の處。檐鈴に付與して断腸を説かしむ」と頸尾で詠じた(附159)。またこれに対して箕輪朴仙は、「秋風の起くる處、林に入りて鳴く。屢々砧の聲を送り、又笛の聲を。満耳の蕭瑟は睡を作し難し。閑愁は偏へに此の中に向ひて生ず」と詠じた(附92)。晩秋の風に乗って聞こえる砧や笛の音の蕭条とした響きは、人をして眠らしむることなく、秋思はふつつと湧き起こってやまないのだと。

『古今和歌集』「秋上」や『和漢朗詠集』「立秋」部に採られて人口に膾炙された藤原敏行の名歌のごとく、目に見えて秋を感じる前に、我々日本人は耳や肌にあふれる風に季節を感じとってきた。そうした繊細な感受性をベースに、漢詩世界の重厚な故事をふんだんに盛り込んで、秋に吹く風をバリエーションをもって表現した、これらは力作であった。

7. 七日から十日

翌七日は晴天に戻り犀川沿いにあつた月華楼に招かれた。鶴山詩によれば(鹿心齋5)、犀川の南に位置しておりここからの眺望は、西郊十里強の風景を視点し得るという。また「連雲に海水は晴れて画ける如く、黛を凝して山容は晩に粧を改む」と西阜詩にもあるから(四宜園135)、野町あたりの茶屋街にあつたのではなからうか。

詩佛詩にもいう(57)、「月華樓は密なる林の梢に出で、曲曲の欄干は半霄に坐す。看尽す夕陽、無限の景。待ち来たる絨月可憐の宵。一湾の流水は藍新たに激ぎ。幾沫の遙山は黛淡く描く」と。西郊は松任あたり、南郊は日本海を遠望し東には白山連峰や大乘寺山・医王山・東山の連峰が見える。また北方の崖下には犀川が勢いよく水飛沫を騰げて流れるのが見え、その河原には人々の足を誘う芝居小屋も眺められたであろう。参加者には詩佛・西阜・鹿心齋の他伊東半仙が知られる。

翌八日も晴れた。この日は西阜の都梁館に詩佛や香林坊緑陰を迎えた(四宜園136)。緑陰は兵助と称して十代で町年寄や銀座役を勤め、文政元年に家柄町人の一人に任じられた人。空翠社中であつて西阜や立齋・梅屋等との交友が多く、北遊に際しても詩佛を自邸に招いている。その緑陰の作にいう(附23)「参差たる高閣は山に對ひて開け。疊石栽松は翠苔を長つ。後圃は常に生菜の羹を供し。飛泉は時に古研の埃を洗ふ」と。東山の峯に面する尾張町界限の商業の中心地にあり、玄関に通ずる石畳の両側には松を植え込み、その下には手入れの行き届いた苔が緑の敷物を広げている。この亭の後方には圃園を擁していつでも新鮮な菜羹を供してくれる。そして庭には泉水が古研の石を洗っている。

九日は雨だったが翌十日はからりと晴れ、原逸荘の臨泉亭に迎えられた。同席した清川綺屏の作にいう(附59)。「秋圃にして山色淡く、風定まりて雨初めて晴る。漁市には炊烟直く、農家には寒鶻横たふ」と。原逸荘も清川綺屏も詳細は未詳であるが、共に空翠社中にあつた町人文人の一人であつたろう。臨泉亭の所在も未詳であ

るが、同席した森西園の作に、「松杉に月暗く路は真に難ぶ。纒かに幽燈を見て一邨を認む。野渡の板橋に霜白き處、何人か我先立つて鞋痕を印せし」とあるから(附107)、市街を出た人の訪れとして稀な孤村にあつたようである。

なお森西園は辰之助と称し、同佛・鳳洲・鳥窠禪師等と号した画家で、詩も善くした。天明三年(一七八三)に生まれて岸駒に学び、後長崎に赴いて明畫を研究し帰って藩侯に仕え、定番御歩等となつて新知百石を拝領した。西阜との交遊が深くその絵も多数残されている。

また同席者の福島脩井の作によれば逸荘宅を「陸羽の居」という(附63)。陸羽とは唐竟陵の人で、茗溪に隱居した人。太子の文学に推されたが就かず、門を閉じて『茶経』三篇等の書を著した。没後茶を売る人は陸羽を茶神として祀つたというから、逸荘も茶人だったのかもしれない。次に逸荘の作を掲げる(附41)。

仲秋奉迎詩佛先生臨泉亭

原 逸荘

別君過六句 相見意殊親 楓色花般麗 蘆花雪樣新

村深犬吠客 秋早雁関人 年熟家家酒 送迎忙四隣

君と別れてより六句を過ぎ、相ひ見て意殊に親し。

楓色は花般に麗はしく、蘆花は雪様に新たり。

村深くして犬は客を吠え、秋早くして雁は人を関す。

年熟す家家の酒、送迎は四隣に忙はし。

逸荘はこの時六句を過ぎていた。村外れにあつた臨泉亭には楓が花のように色づき、村の灯りも淋しい孤村は、野邊の板橋を渡って行き着くのであつた。なお森西園の「新晴」もこの時の作である。

また同じく上旬頃、中澤氏の脩竹園にも迎えられた。この人も確定を得ぬが、中澤息齋を当ててよからうかと推測する。韓西臯や阪井梅屋等と交遊してその遺稿に名を留める人である。なお本多政均の儒者に抱えられた越中出身の中澤俊もいる。湯島聖堂に漢学を修めて帰藩して五人扶持を賜つて陪臣となつたが、文政十一年願い出て町儒者となつた。息齋はこの人に比定される。中澤氏の脩竹園もどこにあるかは未詳であるが、詩佛によれば次のようである(92)。

「脩竹園は脩竹の裏に在り。萬竿の脩竹は蒼穹を凌ぐ。中に主人の清きこと竹に似たる有り。人間の塵壘を一洗して空し。(中略)酔ひて漢書を読む何の下物ぞ。四面の脩竹は清風を生じ。許の如きの下物争でか酔はざらん。酔裏の劇談気は虹を吐く。脩竹主人 我々を識る。百萬の劍甲は胸中に森たるを」と。竹園は四面を竹に囲まれ、そこに酔つて漢書を読む。「下物」とは酒の肴である。酔つて漢書を読むというのは、これはどうした肴といえるかというが、いわば竹林の賢人もいえる生活を送る主人に対して詩佛はいう。貴方こそ百萬の劍甲を胸中の奥深くに秘めているのだと。

8. 十日以降

十日に晴れていた空も翌日の夜前から雨となり、十二日頃からは北風も加わつてめつきり寒くなった。そんな十三日、詩佛は富田痴龍・鶴坡親子を訪ねた。時に痴龍は七十八歳で、職を辞して五百石を受けて隠居していた。息の鶴坡は諱を景煥かげわくといひ時に四十九歳であつたが、文政元年家督を嗣いで二千石を受けて父の従事していた天徳院請取火消の役に従つていた。共に漢籍に通じ、父は詩賦に加えて博覽強記で国史に精通して、『燕台風雅』の編等五十数冊の著

があつたが、息は父ほどの才を与えられていなかった。詩佛を迎えて痴龍は詠う(附15)。

甲申八月十三日謝詩佛老人尋舊盟再見訪小樓 富田痴龍

乾雪上眉雙井年 灰心再欲爲翁燃

清風激世真詩聖 濃醉成鄉是酒仙

樓外青山盟不冷 筆端明月句殊圓

秋容挾閨霜楓未 殺景愧難粧飲筵

乾雪上の眉 雙井の年、灰心も再び翁のために燃えんと欲。

清風に世を激するは真の詩聖、濃酔に郷を成すは是れ酒仙。

樓外の青山に盟は冷やかならず、筆端の明月に句は殊に圓なり。

秋容は、閨を挾むも霜楓は未し、殺景は愧ず飲筵を粧ひ難きを。

「雙井年」は「井井の年」で、ものごと筋道がたつていて乱れない年、つまり望みに従つて行動しても道にそれなくなる七十歳をいう。あげも眉も乾雪の如き年齢となつてはいるが、詩佛の来訪によつて灰の如き心も再び燃え上がるような気持ちがあるといつてその訪問を喜び、閨月の秋といつても霜楓はまだ色づかず、飲筵の粧を成すには殺景すぎると恥じた。同席した鶴坡もいう(附18)。

草堂再迎詩佛先生 富田鶴坡

一別三霜して再び盟を結び、舊話を尋ねて餘情を尽さんと欲。

交は秋水の淡くして底無きが如く、論は雲峰の高くして平らかならざる似し。

墨を灑ぐ竹は風雨を牽きて動き、詩を吟ぶ聲は鬼神をして驚かすむ。

請ふ君、須く此に淹留すること久しかるべくして、山中に向かひ

て勝を追ひて行くを休めよ。

詩を論じ世の浮薄に激して酒を飲む様は、正に詩聖とも酒仙ともいえ、その筆端に成る竹墨の姿には、いまにも風雨を呼び込む力がある。なおこの日は山中温泉行きも話題になったようである。鶴坡はいう、ここに暫く滞在して山中へは行かないでほしいと。

十四日も雨だったが、この雨の中を詩佛は伊東半仙を訪れた。半仙は韓西皐の三弟である。韓家を出て伊東家の嗣となり、西皐と共に詩文を能くし詩佛の北遊や再北遊にはその門弟となつて行動を共にしている。空翠社中の一人でもあり、文政十二年十月の没に際しては、社友によつて追悼の詩宴を催されている。後出する中村碧山は半仙の次弟である。その時の作に云う(附99)。

中秋前連日雨

伊東半仙

燈は暗く風鳴りて雨は未だ休まず。幽窓に獨り聴く落梧の秋。連宵只だ恐る晴を得難きことを。是は閑を愁へず月のために愁ふ。仲秋に向かつても一向に止む気配のない雨を気にしての作であったが、その恐れの通り、この雨は中秋になつても止まなかつた。前回の約束に従つて詩佛は、空翠・半仙を伴つて致堂の環翠樓を訪れた。時に致堂が詩佛の酒仙然とした人柄を詠う(致堂詩稿八53)。

閏八月十五日招飲詩佛先生席上賦呈

横山致堂

先生不管世間愁 先生は管せず世間の愁へを。
到處飄然任居留 到る處に飄然として居留に任す。
醉遍酒家江戸市 酒家に酔遍す、江戸の市。
来看金沢月明秋 来りて看る、金沢月明の秋。
次いで当夜の詩題であつた「無月」を詠う(致堂詩稿八55)。「今

宵客を迎へて茅柴を煖む。雲霧は濛濛として好懐を欠く。閏を添ふる天公には元意有るを。嫦娥は怪しくも、底ぞ人に乖くや」と。「茅柴」は酔つてもすぐ醒めてしまう薄い酒。粗酒であるが温めて準備をしていたが、濛々とした雲霧によつて台無しになつてしまつた。閏月を天の神が私達のためにせっかく用意してくれたのに、嫦娥はどうしてその意に叛くのかと。また詩佛も詠う(63)。

閏月十五夜宴横山大夫環翠樓

詩佛

前月留滯越中州 多姑湖上值中秋
欲棹流光泛孤舟 何因風雨作月聾
湖上古寺茶一甌 萬斛無術遣閑愁
今月中秋環翠樓 風雨依前晚不収
詩分韻酒添籜 不管滿天痴雲稠
鮮鯽之鱠鮮蓴油 三寸秋筍更珍羞
龍髓鳳腦何煩求 直疑身來宴蓬邱
人生此樂與仙境 相伴堪笑
八萬千戸 以七寶修

前月留滯す越中州、多姑湖上にて中秋に値ふ。

流光に棹して孤舟を泛べんと欲。何ぞ因ん、風雨の月に聾を作すを。

湖上の古寺に茶一甌、萬斛も閑愁を遣るに術なし。

今月中秋環翠樓、風雨は前に依りて晩も収まらず。

詩は韻を分ち、酒は籜を添ふ。管せず、満天に痴雲の稠まれ

るを。
鮮鯽の鱠、鮮蓴の油。三寸の秋筍、更に珍羞。

龍髓鳳腦、何ぞ求むるを煩はさん。直ちに疑ふ、身は来りて蓬邱に宴ずるか。

人生にて此の樂しきは仙境に與し。相ひ俸し、笑ふに堪へたり、八萬千戸、七寶を以つて修するを。

「鮮鯽」は新鮮な鮓、「鮮蓴」は新鮮なじゅんさい、共に故郷を思い起こす食べ物である。また「珍羞」はおいしい御馳走で、「龍髓鳳腦」はこの世にはない食べ物、また「蓬邱」は蓬萊山である。先月の十五夜には多湖湖上の「流光」つまり、舟中から湖上に映る明月を賞しようとしたが果たせず、今月も痴雲に妨げられて果たさなかつた。しかしそれも構うまい。「蓴羹鱸膾」のごとき心のこもつた御馳走や、この世の食べ物とも思えぬ御馳走で、まるで蓬萊山で宴をしているようなのだから。加賀藩八萬千戸はさながら七寶をもつて飾られた仙境のごとくであると。

連日の雨は翌十六日には晴れた。十六夜だったが、空翠社中の人々が集まつて半古齋で一日遅れの月見の宴が持たれた。詩佛・空翠の他に、立齋と商齋の参加が知られるが、他にもいたことは、立齋の作に「主人の韻に次して」とあることから推測される。立齋のいう「主人」も小集のあつた「半古齋」も未詳である。ここでは商齋の作掲げる（商齋34）。

半古齋賞月

龜田商齋

二八秋天雲尚横

二八の秋天、雲は尚ほ横たふ。

樓頭光景且開情

樓頭の光景は且く情を開つ。

倚欄自耽酬無句

欄に倚りて自ら耽ず、酬ふるに句無きを

孤負今年一夜明

今年の一夜も孤負して明く。

9. 閏八月中

河合東橋が詩佛を招請したのは閏八月中だと思えるが、日時は確定しない。東橋の出自は未詳であるが、藩士で河合氏を名乗る人に河合良温、字季恭がいる。良温は加賀八家の一である村井長道に儒医として九人扶持で専事した人。鹿鳴社という教授所を持つて力を尽くした人であるが、この良温かさなけばその一族かとも思える。良温は西華や商齋との交遊が数回知られるのみで他はない。なおこの時も商齋が参加した。（附57）（商齋36）

邀詩佛先生敝廬喜賦呈

河合東橋

病床昔歲遇君帰

病床の昔歳、君の帰るに遇ふ。

永恨追隨愆好期

永く恨む、追隨する好期を愆ふを。

假我数年天意厚

我に数年を假すに天意厚し。

幸逢今日再遊時

幸ひに逢へり、今日再遊の時に。

三. 山中温泉へ

気まぐれな秋の天候は、十八日も快晴をもたらした。心地よい秋晴れの中、詩佛・空翠に伊東半仙・龜田鶴山・立齋を加えて、曉に青山亭を發つて山中温泉に向かつた。青山亭を出たのは夜もまだ明けきらぬ曉であつた。同行した鶴山が「曉色の熹微、千峰姿態、皆な詩料なり」と題して詠う（鹿心齋8）。「残月輕霜、曙けんと欲る天。茶を喫んで好在をかわす曉風の前。秋光变幻、須臾の裏。十里の平鋪、一帶の煙」と。有明の月が空にかり、うつつらと霜の降りた町並みも曙けようとしている。發つにあつて茶を喫み、それ

では行つてきます、ごきげんようと、見送る人々と挨拶を交わして
発つ。弱々しい秋の日ざしはそれでも刻々と風景を変え、前方に広
まる平坦な街並みに朝餉の煙の立ち上るのも見える。深閑として音
もない大地、そして白々として曙けゆく空、これから始まるであろ
う旅への期待で膨らむ胸。そうした期待で、日頃見慣れて平凡だつ
た風景が、今日は格別に新鮮だといふのである。

日が昇れば加賀平野の風景は一変する。穫り入れ前の芋の葉は枯
れ枯れでそんな畑の中に冬支度に入る葱の葉は新緑である。また晚
秋の田では、刈り取り後の田の間に麦が芽を出し、所々には蕎麦の花
が雪のように白い花を咲かせて続いている。格別目新しい風景では
ない。ありふれて生活のにおいのブンブンする、こうした田園の風
景すらも山中へ発つ詩佛達の目には新鮮で目を洗われるように映つ
た。詩佛も「閏八月十八日発金澤遊山中温泉途中作」と題して詠う
(詩聖堂八)。「芋の葉の紫は衰へて葱の葉は緑にして。香杭刈り尽
して麦は芽を抽く。老饑に別に涎を流す處有り。一路の蕎麦田雪白の
花」と。朝酒を交わして半ば醒めかかった頃、一行は粟生津に到達
し、ここで暫く留まつてその眺望を楽しみ明翫屋の松風館に一泊し
た。鶴山は「卯酒半ば醒め、真に味有し。且く勝處に逢ひて便ち
遅留す」と詠じ(鹿心齋9)、立齋は雄大な手取川の眺めと、その
彼方に遠望される山並みを愛でた(立齋98)。

明翫屋とは嘉兵衛、山田淡菊のことである。本吉の船間屋で酒造
を業として町年寄も勤め、同時に毎年京に出かけて風雅の交遊をし
た文化人で、書を村瀬栲亭に畫を浦上春琴に受けた。火災によつて
家財の尽くを灰燼に帰した金子鶴村を援助して、京で皆川淇園に従

学せしめた人でもある。この人の亭を松風館といい、多彩な文人が
集つたが、安政五年の大火で悉く失い間もなく七十歳で没した。こ
の時同宿した立齋の作にいう(立齋99)。「客子飄然一片の雲。好
し郷思を將て紛々たるに任す。君と同宿す松風館。夜を徹して松聲
を枕に對して聞く」と。異郷にあつて郷思紛々たる詩佛の心に、松
風の声がいかにもの悲しく響くと詠う。日本海に面する砂丘一帯
は松林が延々と続く。そんな松林を背にし、手取川を前にして松風
館があつた。

十九日は、本吉より梯川を渡つて串茶屋あたりにあつた望湖亭で
休息を取つた。立齋は望湖亭のたたずまいを「一座の茅亭は葦汀に
立ち。湖山の風色は窗櫺に満つ」と詠う(立齋100)。「櫺」はれんじ
で欄干。望湖亭は琴湖の葦の生える水際に建ち、その窓からは白山
の山並みが一望された。天候は前日に続いて気持ちよい晴天で、窓
外からは深まり行く秋の風景と松林が目に入った。

暫くの小憩の後舟で琴湖を経て動橋まで進んだ。この間の舟路を
詠じた立齋の作が四首ある。琴湖の勝景地では舟を止めて、獲つた
鮮魚の刺身を肴に杯を把つて詩を吟じつつ舟を進めた。風もなく晴
れた秋空の下、琴湖の面は鏡のように澄み、岸边に点在する村々に
揺れる柳は、不揃いの歯並びのように列なり、葦の衝き立つ岸边に
は紅い花をつけた蓼が群を成して咲いている。そしてその湖面に
は、冬支度を始めた白山が姿を写していた。次はその四首の内の第
三首めである(立齋103)。

自琴湖抵動橋駟舟中作 鏡 立齋

古村半断僅通船 古村半は断えて僅かに船を通じ。

衰柳疎中雁齒聯 衰柳は疎らかな中に雁齒と聯ぬ。

漁艇乍来添酒興 漁艇乍ち来りて酒興を添へ。

銀糸玉膾研溪鮮 銀糸玉膾は溪鮮を研りたり。

動橋で舟を降りれば後は、動橋川に添って山中への路を上るだけである。県道39号線、現在の山中伊切線である。その道に入って立齋が詠う（立齋105）。「港を断れて舟を辞して駅亭に上る。還岐路従り山程に赴く。吟眸因りて更に遙囁を貪るために。却て肩輿を捨てて馬を借りて行く」。山路に入れば後は眺望を得ながら温泉まで一続きの道である。駕籠では眺望を得ないからといってわざと馬に乗って行った。温泉に入る少し前に伊切線から外れて、荒谷の方に迂回して鶴の瀧を覗た（立齋107）。「勝地山川、靈秀鍾まる。就中、荒谷は是れ仙蹤。雲崖千尺、巉巖裂け。直下に雌雄、白龍を驚かす」と。鶴の瀧は、女良ヶ瀧・千足ヶ瀧・翠簾ヶ瀧を併せた山中四瀧の一人で、山中八勝の一つでもある。蔓ヶ瀧ともいい、村社荒谷神社の傍をしばらく山に入ると、動橋川が三段の石棚を激しく落ち、上段は二流にわかれて落ちてくる。鬱蒼とした老樹の繁茂する洞合を流れ落ちてくる様は、鶴に乗じた仙人が、まさに地上から翔けんとする如くである。

この鶴の瀧を覗た一行は、再び伊切線に戻り黒谷峠を越えて温泉に向かった。ここは一带平坦とはいえ人家も見えぬ山中の小径である。動橋川添いの小径を黙々と上って行くと、輝きを失ってきた晩秋の日は後を追うように迫って来て、黒谷峠の深い林は洞穴のように不気味であった。そんな峠道を下りきると突然林が切れて、耳には溪水の音が聞こえてきた。次はその時得た詩佛の作である（詩聖

堂八）。

赴山中途中作 詩佛

出盡深林裏 忽聞溪水聲 山皆雖然面 路却似初程

野草開前後 香風管送迎 漸知投宿近 白石隔村明

深林の裏を出て盡して、忽ち聞く溪水の聲。

山は皆熱面すといえども、路は却て初程に似たり。

野草は前後を開け、香風は送迎を管る。

漸く知る、投宿に近きを、白石は村を隔てて明らかし。

黒谷峠の山道を抜けると、後方に小於兎石が聳え、眼前に山中温泉の街並みと往き来する人々が見える。そして大聖寺川の溪流の響きを耳にし、どこからともなく漂ってくる湯の香にふれた時、詩佛にはこの温泉郷が常春の桃源にも見えたのであろう。

かくして山中に入った一行は先ず医王寺に廻り、後背の水無山に登ってそこからの眺望を楽しんだ。ここからは温泉の全容はいうまでもなく、白山や日本海までも一望された（立齋106）。そうして眺望を得た水無山を下りて、長い一日の旅を終えて一行は黒谷橋を渡って宿舎へと入った。立齋の作を借りる（立齋108）。「僕夫は解せず烟霞の事。復た羊腸を繞って岫腰を下る。紅日の沈む時、吾れ輻に在り。潺湲を夢に和して溪橋を渡る」と。時は夕刻で、夕陽が山や温泉街を染めて、一日の旅程で疲れ切った一行の耳に、橋下の潺湲としてさらさらと流れる声が、夢の中のこのように聞こえてきた。この時の一行の様を詩佛も詠う（詩聖堂八）。「輻輳五六乘、僮僕十餘人。来て山中の客と作り、房を分ちて似て隣を結ぶ。烟霞は唱酬に富み、茶酒は往還して頻りなり。太だ似たり、知心者の

相ひ携へて世塵を避くるに」と。詩佛たち一行は、これより九月五日までの二週間余りを山中で過ごした。

山中温泉は、富士写ヶ岳からの溪流を束ねて流れる大聖寺川に沿って成った街である。開湯を行基、中興を長谷部信連とする加賀藩最古の温泉で、芭蕉の滞在の後、文化人の来湯はひきもきらなかつた。なかならずく鶴仙溪を中心とする景勝は、河島正卿や大地昌言によつて山中十二景が選せられてより、詩佛は八勝を撰び銭田立齋が十勝を選び、杏凡山・岡田呉陽が八勝を詠じ、重野成齋や巖谷一六・日下部鳴鶴が山中温泉十二詠を詠じ、棉引東海も山中雜詠を詠じた。殊に加賀文人達は、詩佛の北遊の度毎に来訪を繰り返し、横山致堂・林蓀坡・富田痴龍・曾田菊潭・林屋山・堀蘭崖・日尾青楓・坂井梅屋・東方蒙齋等の加賀や大聖寺藩士はいうまでもなく、野村空翠・龜田鶴山・銭田立齋・杏凡山・林商齋・韓西阜・龜谷守拙・伊東半仙等の商人達、更に明治ともなると全国からの来訪はひきもきらなかつた。従つてその作は、『燕台風雅』『蘆城風藻』『越中古今詩鈔』等の類従のみならず、『北遊詩草』『再北遊詩草』『詩聖堂詩稿』を始めとする江戸文人達の遺稿や詩草に多数遺され、また『加賀山中温泉余香』や『江沼郡誌』等にも多数選せられている。今いちいち数は立てぬが、著者の目に入ったものだけでも、三百五十首近くになる。

さて一行は山中では宿舎を白虎楼にとり（梅屋二七）、宿舎では前掲の詩佛もいふように部屋を五つ並べ、それぞれが隣り合せて自由に出入り出来るようにした。そうして互いに一部屋に寄り集まつて歎筵を共にし、音曲をしつらえ山菜や海鮮を盛つて詩を詠じ

た。秋晴れの日には勝地に出かけ、でなければ谷間に鳴く鳥や野の花を観て賦詩朗吟した。三友（琴詩酒）を共にし酒仙八人を伴つての樂遊は良辰・美景・賞心・樂事の得難い四美を併せて、さながら天台山や桃源の仙境での日々に似て、一日に千秋を経るようであつた。次はそうした日々を綴つた立齋の作である（立齋119）。

山中客舎書事

錢立齋

留滯已幾日	逍遙若經年	耳不聞塵事	眼曾鑿山川
況又同遊客	平生其所親	加之以詩伯	詩伯江戶人
已侵千里路	更茲伴吟鞭	旅亭共一舍	分房結並隣
彼此互迎送	日夜開歎筵	筵席引三友	飲徒啜八仙
甕貯鄉土聖	瓢蓄村店賢	行賞傳蔬菓	小市饒海鮮
嗜好只如意	歌吹且流連	相携遊勝地	林壑媚晴暄
澗鳥晚自啼	野花秋更妍	散步紅葉寺	朗吟白雲巖
夕酌道明月	朝烹岩桂泉	采石携妓到	菅溪晤樵還
寔能并四美	一一興無辺	不知有夜雨	爛漫日高眠
天台久絕路	桃源聞避秦	爭似清平世	遊此小洞天
吾年過半百	此事曾無前	假使有再遊	若斯會同人
只愁明日去	復被俗累牽	一宵對燈火	把翰寫長篇
拙惡雖可厭	不敢忍棄捐	以之為帰遺	但當郷友傳

留滯すること已に幾日、逍遙は年を経る若し。

耳には塵事を聞かず、眼も曾ち山川に鑿く。

況や又同遊の客は、平生其れ親しむ所。

之に加えて詩伯を以てす、詩伯は江戸の人なり。

已に千里の路を侵し、更に茲に吟鞭に伴ふ。

旅亭は一舎を共にし、房を分ちて隣を並べて結ぶ。
彼此互いに迎送し、日夜歓筵を開く。

筵席には三友を引き、飲徒は畜八仙たり。

甕には郷土の聖を貯へ、瓢には村店の賢を蓄ふ。

行實は蔬菓を傳へ、小市には海鮮饒なり。

嗜好は只意に如せ、歌吹は且た流連たり。

相ひ携へて勝地に遊び、林壑に晴暄を媚ぶ。

澗の鳥は晩に自ら啼き、野の花は秋に更に妍なり。

散歩す、紅葉の寺、朗吟す、白雲の巖。

夕べには道明の月に酌み、朝には岩桂の泉に烹る。

采石には妓を携へて到り、菅溪には樵に晤して還る。

寔に能く四美を并せ、一一に興は無辺なり。

夜に雨あるも知らず、爛漫として日高く眠る。

天台には久しく路を絶え、桃源には遊秦を聞く。

清平の世を争ふ似く、此の小洞天に遊ぶ。

吾が年は半百を過ぎるも、此の事は曾て前に無し。

假ひ再遊有ら使むれど、斯の會の同人に若かんや。

只だ愁ふ、明日去れば、復た俗累に牽かるるを。

一宵燈火に對ひ、翰を把りて長篇を寫す。

拙悪は厭ふべしと雖も、敢へて棄捐るに忍びず。

之を以て帰遣せんがために、但だ郷友の傳に當つ。

北遊に際しては八勝を選んだ詩佛は、今回は十勝を選んだ。立齋

の「山中十勝」によれば、医王山・高瀬・采石巖・蟋蟀橋・桂泉・

小不二・道明淵・味谷・温泉・巨巖である。八勝に比せば温泉と巨

巖の二勝を加えるが、巨巖とは四十九院隧道の入り口付近の上方にある大岩で、小於兔石と呼び、高さ八丈餘ある大岩である。その形状が兎が兎つまり、虎に似ていたのでそう呼ばれた。立齋がいう（立齋118）、「跋扈す白額の虎。孤立して山腰に立つ。澗水を飲むを須ひず。時ありて林に嘯きて獵たり。山神に一たび縛せられて自り。長く行客の標と成る」と。白色の巨巖は風に嘯いて鳴って、現在では旅人の目印になつていゝという。なお大地昌言にも、河島正卿によつて選せられた「山中十二景」に賦した作もある。宝曆五年成立の『感齋先生詩草』に録されたもので、温泉烟霞・富寫晴雪・黒溪晚霞・道明秋月・二店翠嵐・桂下清泉・醫王山櫻・大巖紅葉・高瀬漁火・蛭橋掃樵・水無啼猿・黒瀬白鷺をいう。ちなみにこの時商齋には菅溪や味谷で遊んだ時の作があり、詩佛にも采石巖・菅溪・味谷の三作がある。

かくして一行は少しぬるめで、心身共にゆつたりと癒されてゆく温湯を楽しみ、晴れば近隣の景勝を探し、或いは小集の部屋を引き換えては賦詩と饗宴を楽しみ、或いは同宿の人々とも飲筵や行楽を共にして、一日として止むことはなかった。その様を立齋は賦す（立齋120）。「僑居には日日共に林を連ぬ。客裡には却て郷に在るよりも親しむ。好し是れ山中に寸事無くとも。但だ唱和を將つて清忙と做す」と。この間、坂井梅屋が宿舎に詩佛を訪ねたり（梅屋67）、また大聖寺の諸友を伴つて大聖寺鉄砲町にある専称寺含雲亭に遊んだりしている（梅屋73）。大聖寺では東方蒙齋もかつて詩佛の門を叩いた人であったから、当然何度かその宿舎を訪ねていたであろう。記録に残らぬので推測するしかないが、そうした人々の来訪も

加えて、立齋もいうごとく「旅舎には筵は止まず、行樂もまた相ひ携ふ」ありさまだった（立齋¹²¹）。

10. 九月

そうしたある日、半仙・空翠・詩佛に大聖寺の東城・梅屋を加えて、一日に鹿島で舟遊びをする計画がもちあがった。しかし晴れ間が急変して雷に雨を加えた荒れ模様は一晚中止まず、この日は急遽中止となった。詩佛はこの雨を、「怪しむこと莫かれ、五更一雨を傾け、人々白雲を袖にし得て来るを」と詠じて、全身濡れ鼠となった様を嗤った（詩聖堂八）。翌二日の午後には晴れたのだろうか、一行は萬法院に遊んだ。詩佛は大聖寺諸君と共にといひ（詩聖堂八）、梅屋にも萬法院の作があるから、梅屋や東城等も同行したいと思える（梅屋78）。

鹿洲萬法院作 坂井梅屋

玉鹿洲の頭樹鬱葱 玉鹿洲の頭に樹は鬱葱たり。

豪遊半雲坐龍宮 豪遊半雲 龍宮に坐す。

揮毫臂欲麾天日 毫を揮へば臂は天日を麾んと欲し。

拳髻身応駕水風 髻を拳ぐれば身は応に水風に駕すべし。

兩寺樓臺波浪外 兩寺樓臺 波浪の外。

孤村聚落荻蘆中 孤村聚落 荻蘆の中。

湖山霽景誰摸取 湖山の霽景 誰か摸取せん。

又是人間欠畫工 又是れ人間 畫工を欠くことを。

萬法院は鹿島の入り口に海を臨んで在った。今はその跡も見えないが、城からやってくる、さながら竜宮の御殿に見え、ここから眺めも眼を奪われるようであった。

そして三日は晴天となり、当初の計画に従って伊東半仙・空翠・詩佛に大聖寺の坂井梅屋・東方潛・山本伯璉・梅田・坂井茂実等を加えて総勢十余人で鹿島や専称寺に遊んだ。

梅屋は大聖寺藩士で土蔵奉行を経て藩主利之の息利建の素説に待して時に五十一歳であった。経学に達して詩文を能くし、天保十一年には学問所習館の会頭となった。また東方潛は大聖寺藩士東方望の二息で、字左衛門と称し字を叔竜、号を蒙齋・東城などと称し三十五歳となっていた。江戸で経学を山本北山に詩を大窪詩佛や亀田鵬齋に質し、書は市川米庵に学び南画を貫名海屋に受けた。兄が早世したため家を嗣いで百二十石を受け、御馬廻頭から土蔵奉行・郡奉行・組外頭等を経っていた。

山本伯璉は詳細を得ぬが、大聖寺の医師で南溟・文玄齋と号した山本文玄齋がありこの人に比定したいと思う。天明三年に生まれ、京に吉益南涯に古医方を学ぶ一方で紀州の華岡青洲に外科を学んだ。次いで長崎と江戸を往還した後、帰郷して開業した。梅田も未詳であるが、大聖寺藩士で後大聖寺町長や県会議員等を勤めた梅田五月の父専次ではないかと推定される。坂井茂実は梅屋の息であるが、天保十年頃早世したようである。なおこの時の参加者は、詩佛の詩には「一艇十餘人、風流好事客」とあり、分韻も十四字になるからこの他に人数いたと思われるが確かめ得ない。梅屋の作にいう（梅屋二75）。「雨歇んで天は洗へる如し。西湖に小舟を貰ふ。荒村は残葉の外にありて。古壘は断煙の頭にあり。鬢は老いて黃鶴を歎き。心は閑かにして白鷗を笑ふ。名勝の地を経過すれば。坐らにして作す、画中の遊びを」と。

またこの鹿島に遊んだ後で、一行は専称寺にも遊んだ（梅屋二76）。専称寺は城中鉄砲町にある真宗西派の寺院で、住持を河崎宗学といひ含雲と号した。宗学はもと越前勝山尊光寺の次男だったが、学寮に入つて助教に任じられ、また頼山陽に從学して詩を能くし、傍ら書畫・茶事を好み十九歳で同寺宗岳の養嗣子となつた。文化元年に生まれこの時結婚後間もない二十一歳で、遊山に同行していた。藩士との交遊も多く特に梅屋との交誼が深かつた。

かくして鹿島等で大聖寺の文人との交誼を篤くした詩佛は、四日山中を發つ。ここでの一週間余りの清遊で、いつの間にか同宿の人々とも顔なじみになつた彼等は、旧知の人のように行樂をも共にしては杯を交わした。交誼を結ぶのも前世からの縁であつたごとく、別れとなると格別に寂しさが身に沁みた。次はそうした別れを賦した立齋の作である（立齋121）。

将帰留別同旅人

錢 立齋

兩月客山中	多興無婦思	同旅南北人	交熟如舊知
往來日相見	見即把酒卮	不止旅舍筵	行樂亦相携
形年共相忘	笑談一不違	今日吾將去	借來惜別離
相遇豈苟且	感箇夙緣奇	不似鄉人別	雖悲有值時
此別実可惜	會面難再期		

兩月山中に客となり、多興なれば婦思無し。

旅を同じくする南北の人、交りは熟して舊知の如し。

往來しては日ごとに相ひ見え、見ゆれば即ち酒卮を把る。

旅舎に筵は止まず、行樂も亦た相ひ携ふ。

形年は共に相ひ忘れ、笑談も一にして違はず。

今日吾將に去らんとして、借に來りて別離を惜しむ。相ひ遇ふは豈に苟且ならんや、箇の夙縁の奇しきを感じるに。似ず、郷人の別れの悲しきと雖も値ふ時あるに。

此の別れは実に惜むべし、會面は再び期し難きなれば。

四日の日中は晴れていた天候が夕方から豪雨となり、その雨は五日の明け方になつてもまだ続いていた。彼等はそんな雨の中の動橋駅を發つた（立齋122）。前日の夜の内に動橋駅まで移動していたのであろう。「暁に起ちて装束を束ね、雨を衝いて行く。路は平らに泥は浅くして一兜（駕籠）輕し。雞聲忽に喚べば金鳥（太陽）覺め。光彩は首で雲際從り生ず」と。

早朝の雨は夜明けと共に晴れて行樂日和になつた。それであちこちを經巡つて琴湖のほとり秋声館に投宿したのは夕刻だつたらうか。一行はここに一泊した。動橋から從つて來た楠芸圃も共に宿した（附65）。芸圃については詳細を伝えぬ。「君を送りて百里、追陪を喜び。臥して聴く、半宵風雪の來れるを。此處に明朝、手を分たんと欲。辞すこと莫れ、今夜玉山の類るるを」と。芸圃は詩佛に、今夜は酔いつぶれるまで酒實めにしますからと言ふ。詩佛も返す（詩聖堂八）。「投宿す湖亭の上、盤殮は客に供して清し。醉泥して眠劣に著くに、衿は鐵くして夢は頻に驚く。暁近くして燈に影無く、秋は深くして秋に聲有り。起き來りて先づ夜を視、相ひ與に晴れに逢ふを喜ぶ。星は林間に在りて爛々、天は水面に從ひて明く。僕僅は猶ほ未だ覺めざるも、鳥雀は已に争ひ鳴く。卯酒を君須く飲むべし、鶯梨は解醒に足るなれば。閑遊は旅行に異なれば、何ぞ必ずしも去るに程を食らん。」と。

芸圃の心配りを有り難く受け止めながら詩佛がいう。泥酔して眠ったのだが、鐵のように固くて冷たい布団ではよくも眠りをなさず、まだ暗い暁に眼を覚ました。外を見ると快晴である。星は林の梢に輝き、その内に空は琴湖の面を染めながら開けて行き、鳥雀も争うように鳴き始めた。さて発つにあたって朝酒でも頂きましょうか、加賀梨でもいただけば酔いもすぐに醒めるでしょうから。まして暇に任せた行遊は日程の詰まった旅行ではなく、時間に制限もないのですからと。^{法也}

〔注〕

注記で示した番号は、各書における作品番号である。本文に関係するものには題号を記し、それ以外の参考作品には作品番号のみを記した。

1. 「再北遊」(附165)にいう。「詩佛先生、金沢に來りて予が家に寓すること數閏月」と。また越中までの道中に關しては、「再北遊」(1)32・33「題高岡陸舟樓」附111・113・115・117・119・122・124・131・134・138・142・145・149・151)、「東林」(3)、「大窪詩佛ノート」を参照。
2. 清風明月樓についての詳細は『北陸古典研究』第27号「文政五年の文人達」でも述べたので参照。また以上は、「再北遊」(37「過半江習靜堂六言」・38「長崎浩齋邀飲清風明月之樓同諸子賦時越後原松洲在坐」・39「平村恵馬蹄石硯賦之為謝」・附109・110・150・152「登高岡古城」)による。
3. 以上「再北遊」(40・41「江村漁舍遊遊奈古浦」・42・43「国府

光西寺」・44・45・附120・121「奉送詩佛先生」・148・153・155)、「東林」(3)による。

4. 『万葉集』卷十七(38)による。

5. 『能州日曆』に「砂場松原をこえて、ヤナイタという三四軒の茶屋あり」とある。

6. 『万葉集』卷十九(419・420)による。なお多祐の「祐」は、詩では「湖」と書き地名では「子」と表記する。

7. 以上は「再北遊」(46・47「水見円満寺」・49・50「多湖浦」・附112・125・126「八月十三日奉迎詩佛先生於弊房時雷雨喜賦呈」・127・130・139・140・146・147・156「同泛布施湖」)「東林」(3)による。

8. この時の詩佛のコースは記されていないが、この後の行程で考えれば、羽咋の飯山まで山越えで行き、そこから高松を経て白尾へと行つたと思える。水見からはほぼ60kmの行程である。

9. 以上は「東林」(4)「再北遊」(51・52・附43「奉寄詩佛先生於能州」44「詩佛先生見訪喜賦」)による。

10. 『龜尾記』は未完であるが、金沢における町名の由来、神社仏閣の来歴、村落の旧跡等を記す。

11. 以上は「再北遊」(52・53「自宮腰村赴金澤」・54「鳩巖瀑布」・55・附26「奉送詩佛先生帰江戸」・60「奉迎詩佛先生到宮腰」・94・123)、「立齋遺稿」(123「詩佛先生遊鳩巖觀瀑布余因未疾不得從賦之奉寄」)(以下「立齋」)による。なお立齋の作は「再北遊」(附94)に同じである。

12. 『國語国文』34号「加越能文人の交遊」三「詩佛の北遊と加越文人」も参照。また北遊の際に龜田鶴山が開いた茶会の盛大さ

については、『北陸古典研究』二十七号にも触れた。

13 以上は、「再北遊」(56)「登孤松岡」・附71「飲韻月樓次主人韻呈詩佛先生」,「四宜園詩稿」(一126)(以下「四宜園」),「鹿心齋遺稿」(7)(以下「鹿心齋」)による。

14 以上は「再北遊」(58)60・61「遊致堂大夫後園席上有詩見贈次韻奉答」・6772・附14「甲申秋閏八月初六詩佛先生見訪弊廬喜賦」・812・7478・92159161「致堂詩稿」卷八(4454)による。

15 以上は、「再北遊」(57)「月華樓集分韻」・62「題中澤氏倚竹園」・72・附23「都梁館席上」・41・59「奉迎詩佛先生到臨泉亭」・63「奉陪詩佛先生到逸莊宅」・72・101・106「陪詩佛先生賦新晴」・107「與詩佛先生飲逸莊分題賦曉行」,「鹿心齋」(5)「重陽後一日登月華樓分韻」,「四宜園」(一135)「甲申閏八月七日同詩佛先生及吟友登月華樓」・136「八月八日同詩佛先生到都梁觀次先生韻」による。

16 以上は、「再北遊」(57)63・附57・15・18・57・93・100・157,「致堂」(八53・55「無月」),「立齋」(96),「商齋遺稿」(34・36)(以下「商齋」)による。

17 以上は、「鹿心齋」(8)「發青山亭曉色憲微千峰變態皆詩料也」・9「粟生津」・10「立齋」(97・98「粟生津」・99「宿松風館次詩佛先生韻」・100「憩望湖亭」・101104「自琴湖抵動橋馭舟中作」・105「離動橋馭赴山路」・106「医王山絶頂」・107「觀荒谷飛泉」・108「過味谷橋」,「詩聖堂」(八「赴山途中作」),「商齋」(3739)による。

18 以上は、「立齋」(118)「巨巖」・119・120「似同遊諸子」・121「將掃留別同旅人」,「梅屋詩集」(二67)「秋夜山中訪詩佛大窪詩宗寓居私答其山中作」・73「秋日同詩佛詩宗伊東一龍野村圓平并諸君子遊專稱精舍含雲亭卒賦得十一真」・76・77「題白虎樓壁」,「商齋」(3739)「鹿心齋」(10)「詩聖堂」(八)による。

19 以上は、「詩聖堂」(八)「九月朔與半仙空翠訪東城梅屋二詩盟於大聖寺將探海岸之勝五更雷雨因有此作」,「與大聖寺諸君會於城外山寺」,「梅屋東城諸君邀遊鹿島舟中分放翁天青雲白十分晴帆鮑舟輕盡日行句為韻得白字」,「宿秋声館」,「梅屋」(二74)「秋夜訪詩佛詩宗寓居約泛舟遊鹿洲有雨不果次韻詩宗」・75「秋日同詩佛詩宗伊東一龍野村圓平東方潛龍山本伯璉梅田□□及男茂実泛舟于鹿洲途中作以放翁句為韻得舟字」・76「又專稱精舍含雲亭作」・78,「立齋」(121・122)「曉發動橋馭」,「再北遊」(附65)「奉送詩佛先生宿秋声館」による。

65「奉送詩佛先生宿秋声館」による。